

西端 敏教授のご退官にあたって

西端教授は経営工学という学際的分野を専門としておられ、その中で設備管理システムの研究に力を注いでこられた。最近、設備と人間との関係に大きな関心を持っておられ、それはさらに新しい広がりのある展開を醸成しつつある。つまり、設備と人間の関係は今、発展する設備に人間が適応する時代から、設備が人間に接近することが課題になる時代になりつつあると考えておられ、さらに、その発想の延長線上に今日のあるべき社会システムが描かれうるのではないか、と考えておられるようである。

私と専門が近いとは言えないので教授の今のお考えをどれほど確かに捉えているか怪しいが、上記のような社会システム論への関心は、私の社会経済システム論の関心と大いに接近してくるのである。教授は上述のような問題の脈絡で時々ロボットの話などをされるが、もともと機械工学系のキャリアを有しておられるので、エンジニア的センスが入っていて興味深い。そのようなセンスから新しい社会システム問題に接近されるという点に、私は多くの示唆的な問題展開が出てくる予感を感じている。

西端教授は、日本設備管理学会の評議員であり、その北陸信越支部の幹事も務めておられ、また、石川県庁を初めさまざまな所で審議会等の委員として活躍されているが、特に注目されるのは、北陸地域の意欲的な中小企業の中堅技術者と「設備投資の経済計算研究会」を組織され、その世話役を続けて来られたことである。これは、地味な研究活動であるが、地域経済への貢献という点からだけでなく、大学での研究と教育の点からも一つの基盤的な仕事と考えられるのである。また、教授はゼミの学生をしばしば工場見学に連れていって教育をされていたが、これは学生ばかりでなく、現場に疎い私のような理論系の教員にも必要なことなので、私もゼミ生共々何度か教授の

お世話になった。

私は教授とほぼ同じ頃に赴任し、いろいろと苦勞を共にしてきたという思いがある。教授は、常に理不尽なもの権力的なものに対してははっきり言うべきことを言って来られた。しかも、その発言と行為は冷静さと論理性を有し、丹念に取られたメモによる確かな裏づけを持つものであった。しかし、私にとって最も心に残ることは、研究室の廊下のちょっとした立ち話において、合唱で鍛えた響きのある柔らかい声で話される何気ない教授の会話である。相手の疲れを自然に癒すようなこのとりとめのない教授との普段の会話の風景は、好きな演劇の舞台シーンのように、私の脳裏に残って行くに違いない。

1997年3月

金沢大学経済学部長

藤 田 暁 男